

調査報告

社会福祉援助技術現場実習における「ケア」体験の現状について ～関西福祉大学社会福祉学部の実習生へのアンケート結果から～

On the Care Work Practice in Social Work Field Practicum:
Results of a Survey in Kansai University of Social Welfare

竹内 美保¹⁾
與那嶺 司²⁾

要約：本研究は、北星学園大学社会福祉学部による「社会福祉援助技術現場実習における『ケア』体験の現状に関する調査報告書」を基礎にして、関西福祉大学社会福祉学部における社会福祉援助技術現場実習の「ケア」体験の実態を明らかにし、社会福祉実習教育における「ケアワーク教育」の課題解決に寄与することを目的としている。本調査のアンケート項目は、1. 「ケア」体験の内容、2. 技術的に高度な「ケア」3. 「ケア」体験の頻度、4. 「ケア」体験の方法、5. 専門的知識と技術の必要性に関する実習生の見解、6. 「ケア」体験時に受けた指導の方法、7. 「ケア」体験の必要性に関する理由説明の有無、8. 「ケア」体験とソーシャルワーカーの仕事内容との関係、9. 「ケア」体験時の不安、10. 「ケア」体験時の危険、11. 「ケア」体験の割合、12. 実習前後のソーシャルワークに対する実習生のイメージ・意識の変化、実習内容の振り返りである。

調査結果より、関西福祉大学における実習生の「ケア」体験の実態が明らかになった。特に実習中の「ケア」体験の内容とこれらの「ケア」項目の実施状況が明確となり、実習内容は、ソーシャルワーク実習ではなくケアワーク実習が中心であることがわかった。加えて、学生からは実習前に一定の知識や技術を学んでおくべきとの回答も多い。これらから、事前の学内実習の重要性を再認識するとともに、社会福祉実習教育を充実させるために大学と現場が協力し、実習内容の検討を重ねる必要があると考える。

Key Words：社会福祉援助技術現場実習 「ケア」体験 ケアワーク教育 実習指導

1. はじめに

社会福祉援助技術現場実習は、学問領域と合致するソーシャルワーク実習を中心に行われるべきであるが、社会福祉施設における現場実習

では実習生はソーシャルワークではなくケアワークに従事していることが多い。にもかかわらず大学等における教育の現場では、実習教育としての「ケア」体験や「ケアワーク教育」をどのように位置づけ、どのような教育を行うべきなのか明確な枠組みを示すことができていないというのが現状であろう。北星学園大学の研究の目的は、「社会福祉実習学生の『ケア』体験の実態を明らかにし、社会福祉実習教育にお

2005年12月9日受付／2006年2月1日受理

1) Miho TAKEUCHI

関西福祉大学 社会福祉学部

2) Tsukasa YONAMINE

大阪人間科学大学 人間科学部

ける『ケア』教育の課題解決に寄与することであり、本研究もこの問題意識と共有する。

本研究は、北星学園大学社会福祉学部による「社会福祉援助技術現場実習における『ケア』体験の現状に関する調査報告書」を基礎にして、関西福祉大学社会福祉学部における社会福祉援助技術現場実習の「ケア」体験の実態を明らかにし、社会福祉実習教育における「ケアワーク教育」の課題解決に寄与することを目的として、本学に必要な基礎データを得るものである。また、本調査結果は、勤務校の社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱの枠で行われている「ケアワーク学内実習」の授業内容に反映させることによって、さらなる教育内容の充実を図るものである。

なお、本調査を実施するにあたって北星学園大学社会福祉学部の主任研究者に依頼し、許可を得て関西福祉大学社会福祉学部の実習生を対象に調査（本学では調査1のみ）を実施させて頂いた。この調査は北星学園大学社会福祉学部のオリジナルとして2002年9月～11月に実施されたものであり、その結果は『北星学園大学特別研究助成（2002年度・2003年度）社会福祉援助技術現場実習における「ケア」体験の現状に関する調査報告書』として刊行されている。

II. 調査の概要

1. 調査対象と調査方法

関西福祉大学社会福祉学部社会福祉学科の2004年度社会福祉援助技術現場実習の科目を履修し現場実習を終了した学生を調査の対象とした。最終授業に参加した学生240名に調査票を配布し、実習生が回答後その場で回収した。なお、調査票の記入の仕方の説明と調査票の回収は、社会福祉援助技術現場実習指導Ⅱのクラスの担当教員（13名）に依頼し、実施した。有効

回答212名（87.9%）について分析を行った。

2. 調査時期

2004年1月に配布し回収した。

3. 調査票

前出のとおり、北星学園大学特別研究助成（2002年度・2003年度）社会福祉援助技術現場実習における「ケア」体験の現状に関する調査のために作成された調査票を使用した。

調査票の内容は、実習生が体験した「ケア」体験の種類を12項目採り上げて、12「ケア」項目を設定し、加えて下位項目として64項目が設定されている。

12「ケア」項目は「送迎」「移動」「体位変換」「着替え」「一般浴」「機械浴」「食事」「歯磨き」「排泄」「洗面整容」「環境整備」「リハビリテーション・活動」であり、「ケア」項目それぞれについて3項目から8項目の計64項目の「ケア」内容が下位項目として設定されている。

調査票は、12「ケア」項目64「ケア」内容ごとに、それぞれの「体験の内容」「体験の程度」「専門的知識技術の必要性」「体験の不安と危険」「スーパーバイザーの指導方法」についての設問と「『ケア』体験前後のイメージ・意識の変化」を設問する内容で構成されている。

4. 留意事項

「ケア」という言葉の使用については、『北星学園大学特別研究助成（2002年度・2003年度）社会福祉援助技術現場実習における「ケア」体験の現状に関する調査報告書』のとおりである。そこでは、社会福祉実践における介助、ケア、ケアワーク等を意味する言葉の定義が十分に整理されていないため、これら未整理のケアを言及せず、本調査の12「ケア」項目及びその下位

項目である64「ケア」項目の内容を「ケア」と限定して使用している。

5. アンケート回答者の基本事項

アンケートの回答者に性別、実習日数、実習

(1) 性別

No		度数	%
1	男	77	36.3
2	女	132	62.3
	不明	3	1.4
	合計	212	100.0

(2) 実習日数

No		度数	%
1	24日間	139	65.6
2	12日間	57	26.9
3	その他	6	2.8
	不明	10	4.7
	合計	212	100.0

(3) 実習形態

No		度数	%
1	一箇所集中	115	54.2
2	オムニバス	95	44.8
	不明	2	1.0
	合計	212	100.0

(4) 現場実習施設機関種別

No		度数	%
1	福祉事務所	24	11.3
2	社会福祉協議会	22	10.4
3	児童相談所	7	3.3
4	母子生活支援施設	3	1.4
5	児童養護施設	39	18.4
6	児童自立支援施設	5	2.4
7	知的障害児施設	1	0.5
8	知的障害者更生施設	33	15.6
9	知的障害者授産施設(通所)	9	4.2
10	肢体不自由児施設	2	0.9
11	重度身体障害者更生援護施設	3	1.4
12	軽費老人ホーム	4	1.9
13	特別養護老人ホーム	36	17.0
14	老人デイサービスセンター	1	0.5
	不明	23	10.8
	合計	212	100.0

形態、現場実習施設機関種別を質問し、以下の回答を得た。

III. 調査結果

1. 「ケア」体験の内容

表1は、実習生の「ケア」体験の内容を一覧表にまとめたものである。実習生が実習中にどのような項目の「ケア」を体験したのか、観察したのか、体験も観察もする機会がなかったのかを質問した結果である。

まず、上位12「ケア」項目のうち、実習中に「体験した」の中で、平均値から高い順に見ていく。もっとも高い値となったのは「移動」の介助で、全体の42.1%の学生が回答した。次いで上位から順に、「環境整備」(41.7%)、「食事」(37.1%)、「着替え」(34.6%)、「一般浴・洗髪」(32.3%)となり、3割～4割の学生がそれらを「体験」していることが明らかになった。2割台では「リハビリテーション」(27.1%)、「送迎」(26.6%)、「排泄」(26.4%)の介助と続いている。1割台は「体位変換」(18.2%)、「歯磨き」(14.5%)、「機械浴」(14.2%)、「洗面・清拭・爪きり・耳掻き」(11.1%)の順位となった。

次に、下位64「ケア」内容から見ると、「体験した」ことの第1位は「掃除(掃き掃除・拭き掃除)」(71.2%)となっており、次いで、食事の際の「準備(誘導・エプロン・配膳等)」(68.9%)、「あと片付け」(66.5%)となった。いずれも約7割の学生が経験している。また、約6割の学生が「歩行の見守り」(60.4%)、「車椅子を押し移動」(59.4%)を体験している。続いて、約5割の学生は「居室の環境整備(生理整頓等)」(51.9%)、「食事の一部介助」(50.9%)、「トイレ誘導(歩行可能者)」(47.6%)、「散歩の見守り」(46.7%)を体験

している。

続いて、約4割の学生が体験した下位項目は以下のとおりである。上位から紹介すると「着替え」の際の「上半身部分介助」(43.4%)、「トイレ内での下着の上げ下ろし」(42.9%)、「着替え」の際の「下半身部分介助」(41.0%)、「上半身全介助」(38.2%)、「歩行可能者のシーツ交換」(38.2%)、「着替え」の際の「下半身全介助」(36.3%)、「一般浴・洗髪」の際の「身体の一部を洗う介助」(35.8%)、「洗髪」の際の「洗髪の一部介助」(35.4%)、「車椅子とベッドや椅子間の移動」(34.9%)、「関節の動きにくい方の着替え」(34.4%)となった。

続いて、約3割の学生が体験した下位項目は、「歩行可能者の乗車時の介助」(34.0%)「一般浴・洗髪」の際の「全身を洗う介助」(34.0%)「歩行可能者の降車時の介助」(33.5%)「歯磨きの部分介助」(33.0%)「食事の全部介助」(31.1%)「買い物の付き添い(指導)」(31.1%)「トイレ内での陰部清拭(陰部を拭く)」(29.7%)「片麻痺の方の着替え」(29.2%)「浴室内の移動介助」(29.2%)「おむつ交換」(26.4%)「食事をしたがらない方の食事介助」(25.9%)であった。

続いて、約2割の学生が体験した下位「ケア」項目は、「湯舟に浸かる介助」(24.1%)、「作業療法・訓練・指導」(23.6%)、「飲み込みが困難な方の食事介助」(23.1%)、「ポータブルトイレでの排泄の介助」(22.2%)、「座位から立位を交換」(20.8%)、「車椅子使用者の乗車時の介助」(20.3%)、「歯磨きの全介助」(20.3%)、「座位になることができない方の着替え」(19.8%)、「車椅子使用者の降車時の介助」(18.9%)、「口を開けるのが困難な方の食事介助」(18.4%)、「寝た状態から座位へ体位を交

換」(17.9%)、「爪きり」(17.5%)、「寝ている方をお向けや横に向ける」(16.0%)、「身体を洗う介助」(16.0%)、「洗髪」(15.1%)となった。

続いて、約1割の学生が体験した下位「ケア」項目は、「陰部の洗浄・清拭」(14.2%)、「ベッドとストレッチャー間の移動」(13.7%)、「浴室内の移動介助」(13.7%)、「機会とストレッチャー間の移動介助」(13.7%)、「うがいのできない方の歯磨き介助」(13.7%)、「機械の操作」(12.7%)、「好き嫌い改善中の方の食事介助」(12.3%)、「洗面所での洗面介助」(11.8%)、「身体(手足・体幹)の清拭(陰部を除く)」(11.3%)であった。

最後に、1割以下の学生しか体験していない下位「ケア」項目は、次のとおりとなった。「口腔清掃」(9.0%)、「開口困難な方の歯磨き介助」(9.0%)、「生理用品の交換」(8.5%)、「発達援助プログラムの実施」(7.1%)、「耳掻き」(6.6%)、「ベッド上での洗面介助」(5.7%)、「臥床者のシーツ交換」(5.7%)、「ベッド上で尿器・便器を当てる介助」(2.8%)、「指をかまれる恐れのある方の歯磨き介助」(2.4%)となった。

以上、表1「ケア」体験の内容から、上位12項目と下位64項目から実習中に「体験」した項目を列举してみた。この中で体験率のポイントの高い項目を見ると、利用者の周辺の掃除、配膳、後片付け等の「環境整備」や実習生が関わっても比較的危険が少ないと思われる見守りや車椅子での「移動」の介助、食事中に手が止まりそうな利用者への声かけを行う一部介助等は際立っていることがわかる。反対に、「洗面・清拭・爪きり・耳掻き」、「歯磨き」のように利用者に対して直接触れたり、危険な動作を伴うと考えられる「機械浴」、「体位変換」の介助や

「排泄」のような利用者のプライバシーや羞恥心に触れる介助は、実習生は体験率が極めて低いことが明らかになった。

2. 技術的に高度な「ケア」

表2は、学生が実習中に観察および体験したことの中で、技術的に高度な「ケア」であると感じた「ケア」内容を示したものである。順位の高いものうち10項目を挙げると、最も技術的に高度な「ケア」と回答したのは、「車椅子とベッドや椅子間の移動」(34.4%)、「歩行可能者のシーツ交換」(20.3%)、「歩行可能者の降車時の介助」(18.9%)、「掃除(掃き掃除・拭き掃除)」(18.9%)、「関節の動きにくい方の着替え」(18.4%)、「買い物付き添い(指導)」(18.4%)、「飲み込みが困難な方の食事介助」(17.5%)、「おむつ交換」(17.5%)、「散歩の見守り」(17.5%)、一般浴・洗髪の際の「全身

を洗う介助」(16.5%)であった。

反対に順位の低い順に10項目を挙げると、「生理用品の交換」(0.5%)、「洗髪の一部介助」(0.5%)、「ベッド上での洗面介助」(0.9%)、「ベッド上で尿器・便器を当てる介助」(1.4%)、「指をかまれる恐れのある方の歯磨き」(1.9%)、着替えの際の「上半身部分介助」(1.9%)、「上半身全介助」(1.9%)、「下半身部分介助」(2.4%)、「洗面所での洗面介助」(3.3%)となった。

以上の結果から、学生は、車椅子からベッド等への移乗の介助に関して、もっとも高い割合で高度なケアであると感じている。実習先において多様な障害特性をもつ利用者の身体を直接介助しなければならない状況の中で、利用者の安全、安楽のために注意を払うことの重要性を実感したようである。このことから、学内実習においては移乗介助を重点的に行い、その他に

表2 技術的に高度な「ケア」

単位%

ケア項目	ケア内容	観察・体験率	観察・体験者に対する最も高度とする者の率
1. 送迎	A. 歩行可能者の乗車時の介助	55.2	4.2
	B. 歩行可能者の降車時の介助	54.7	18.9
	C. 車椅子使用者の乗車時の介助	49.1	15.6
	D. 車椅子使用者の降車時の介助	48.6	16.0
2. 移動	A. 歩行の見守り	66.5	14.2
	B. 車椅子を押し移動	62.7	7.1
	C. 車椅子とベッドや椅子間の移動	48.1	34.4
	D. ベッドとストレッチャー間の移動	24.5	5.2
3. 体位変換	A. 寝ている方をあお向けや横に向ける	22.1	3.8
	B. 寝た状態から座位へ体位を交換	26.4	13.7
	C. 座位から立位を交換	26.9	12.3
4. 着替え	A. 上半身全介助	41.0	1.9
	B. 上半身部分介助	45.3	1.9
	C. 下半身部分介助	43.4	2.4
	D. 下半身全介助	40.5	5.2
	E. 座位になることができない方の着替え	25.0	6.1

	F. 関節の動きにくい方の着替え	38.2	18.4
	G. 片麻痺の方の着替え	33.4	8.5
5. 一般浴・洗髪	A. 浴室内の移動介助	41.9	10.8
	B. 身体の一部を洗う介助	47.1	3.8
	C. 全身を洗う介助	46.7	16.5
	D. 洗髪の全介助	48.1	4.7
	E. 洗髪の一部介助	46.7	0.5
	F. 湯舟に浸かる介助	42.5	11.8
6. 機械浴	A. 浴室内の移動介助	24.1	5.2
	B. 機会とストレッチャー間の移動介助	23.1	8.0
	C. 身体を洗う介助	24.5	7.5
	D. 洗髪の全介助	24.5	1.4
	E. 機械の操作	—	—
7. 食 事	A. 準備（誘導・エプロン・配膳等）	71.7	5.2
	B. あと片付け	69.8	4.2
	C. 食事の一部介助	58.0	3.8
	D. 食事の全部介助	44.8	11.8
	E. 食事をしたがらない方の食事介助	40.5	12.3
	F. 好き嫌い改善中の方の食事介助	25.5	6.1
	G. 口を開けるのが困難な方の食事介助	28.8	3.8
	H. 飲み込みが困難な方の食事介助	35.4	17.5
8. 歯磨き	A. 歯磨きの部分介助	35.8	9.4
	B. 歯磨きの全解除	27.8	9.9
	C. 口腔清掃	16.1	3.8
	D. 開口困難な方の歯磨き介助	13.2	8.0
	E. うがいのできない方の歯磨き介助	17.9	4.7
	F. 指をかまれる恐れのある方の歯磨き介助	7.1	1.9
9. 排 泄	A. 排泄物の始末	41.5	4.2
	B. トイレ誘導（歩行可能者）	50.0	6.6
	C. トイレ内での下着の上げ下ろし	47.6	7.1
	D. トイレ内での陰部清拭（陰部を拭く）	37.2	6.1
	E. ポータブルトイレでの排泄の介助	29.3	3.3
	F. ベッド上で尿器・便器を当てる介助	6.6	1.4
	G. 生理用品の交換	10.9	0.5
	H. おむつ交換	33.9	17.5
10. 洗面・清拭・爪きり・耳掻き	A. 洗面所での洗面介助	17.9	3.3
	B. ベッド上での洗面介助	6.2	0.9
	C. 身体（手足・体幹）の清拭（陰部を除く）	17.4	7.1
	D. 陰部の洗浄・清拭	18.9	6.6
	E. 爪きり	31.2	11.8
	F. 耳かき	17.4	4.2

11. 環境整備	A. 居室の環境整備（生理整頓等）	58.0	13.7
	B. 掃除（掃き掃除・拭き掃除）	71.7	18.9
	C. 歩行可能者のシーツ交換	41.5	20.3
	D. 臥床者のシーツ交換	6.6	7.5
12. リハビリ テーション・ 活動	A. 散歩の見守り	47.2	17.5
	B. 買い物の付き添い（指導）	32.5	18.4
	C. 発達援助プログラムの実施	10.9	4.2
	D. 作業療法・訓練・指導	34.9	16.5

注) 上位項目別の平均値は算出せず

シーツ交換（ベッドメイキング）、おむつ交換の方法、衣服の着脱の介助、嚥下困難な方への食事介助の方法を事前に学習しておく必要があるといえるだろう。

3. 「ケア」体験の頻度

「ケア」体験・観察を実習中に行った頻度を表3に示した。上位12「ケア」項目のうち体験した頻度の高かった項目は、1位から順に「食事」（M=3.57）、2位「着替え」（M=3.49）、3位「環境整備」（M=3.42）、4位「排泄」（M=

3.34）であった。反対に体験頻度の低い項目として、最下位から「洗面・他」（M=2.52）12位、「送迎」（2.61）11位、「歯磨き」（3.02）10位、「リハビリ・他」（3.05）の9位であることがわかった。

これら体験頻度の高い項目と前出の体験率の高い項目の関係を見てみると、体験頻度1位の「食事」の体験率は3位、体験頻度2位の「着替え」の体験率は4位、体験頻度3位の「環境整備」の体験率は2位、体験頻度4位の「排泄」は体験率7位となっており、体験頻度の上位4

表3. 「ケア」体験の頻度

実数 (%)

項目	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> ほとんどしなかった ← → 頻繁にした </div>					計 [平均値]
	1	2	3	4	5	
1. 送迎	27 (21.6)	33 (26.4)	38 (30.4)	16 (12.8)	11 (8.8)	125 [2.61] ⑪
2. 移送	17 (12.1)	23 (16.3)	40 (28.4)	26 (18.4)	35 (24.8)	141 [3.28] ⑤
3. 体位変換	10 (15.2)	11 (16.7)	15 (22.7)	14 (21.2)	16 (24.2)	66 [3.23] ⑦
4. 着替え	10 (9.8)	17 (16.7)	23 (22.5)	17 (16.7)	35 (34.3)	102 [3.49] ②
5. 一般浴	17 (15.3)	21 (18.9)	27 (24.3)	28 (25.2)	18 (16.2)	111 [3.08] ⑧
6. 機械浴	5 (10.2)	9 (18.4)	17 (34.7)	4 (8.2)	14 (28.6)	49 [3.27] ⑥
7. 食事	14 (9.2)	21 (13.8)	37 (24.3)	25 (16.4)	55 (36.2)	152 [3.57] ①
8. 歯磨き	16 (18.4)	19 (21.8)	20 (23.0)	11 (12.6)	21 (24.1)	87 [3.02] ⑩
9. 排泄	15 (13.2)	18 (15.8)	29 (25.4)	17 (14.9)	35 (30.7)	114 [3.34] ④
10. 洗面・他	13 (16.3)	28 (35.0)	27 (33.8)	8 (10.0)	4 (5.0)	80 [2.52] ⑫
11. 環境整備	10 (6.5)	31 (20.3)	43 (28.1)	23 (15.0)	46 (30.1)	153 [3.42] ③
12. リハビリ・他	18 (13.7)	25 (19.1)	45 (34.4)	19 (14.5)	24 (18.3)	131 [3.05] ⑨
合計	172(13.4)	256(19.9)	361 (27.6)	208 (15.4)	314 (23.4)	1311[3.15]

項目のうち「食事」「着替え」「環境整備」の3項目は、体験率と同様に上位を占めていることがわかった。前出の体験率において最も高い項目となった「移動」の体験頻度は5位となり、体験率7位の「排泄」は、体験頻度4位に入っている。

このことから、食事介助、衣服の着脱の介助、環境整備、排泄介助については事前学習において必要な内容であると言える。また、それぞれの介護技術における重点的な技術項目については、体験率の高い順位を示した項目を取り入れる必要があるだろう。

4. 「ケア」体験の方法

表4は実習生の「ケア」項目の体験の方法に関する結果である。実習生が「ケア」体験や観察を行う際、現場の実習指導者はどのように関

わっているかという質問に対して、「毎回職員と一緒にいった」と回答したのは全体の33.7%であり、「最初だけ教えてもらいあとは自分ひとりでいった」が38.7%、「一人でいった」が15.5%、「その他」が10.3%であった。

「毎回、職員と一緒にいった」と回答した中で、「ケア」項目別に割合の高かったのは、「機械浴」(65.2%)、「送迎」(45.9%)、「リハビリテーション・他」(39.7%)、「一般浴」(34.3%)、「体位変換」(33.9%)であった。また、それを体験した実習生の多い順に「送迎」56名、「リハビリテーション・他」52名、「移動」43名、「環境整備」38名、「一般浴」37名となっている。

また、「最初だけ教えてもらい、あとは自分一人でいった」と回答したのは、多い順に「食事」(63.1%)、「着替え」(52.0%)、「歯磨き」(47.1%)、「環境整備」(46.7%)であった。「一

表4. 「ケア」体験の方法

項目	実数 (%)				計
	1	2	3	4	
1. 送迎	56 (45.9)	25 (20.5)	10 (8.2)	31 (25.4)	122
2. 移送	43 (30.5)	52 (36.9)	33 (23.4)	13 (9.2)	141
3. 体位変換	21 (33.9)	21 (33.9)	6 (9.7)	14 (22.6)	62
4. 着替え	30 (29.4)	53 (52.0)	8 (7.8)	11 (10.8)	102
5. 一般浴	37 (34.3)	44 (40.7)	15 (13.9)	12 (11.1)	108
6. 機械浴	30 (65.2)	9 (19.6)	1 (2.2)	6 (13.0)	46
7. 食事	25 (16.8)	94 (63.1)	15 (10.1)	15 (10.1)	149
8. 歯磨き	17 (19.5)	41 (47.1)	21 (24.1)	8 (9.2)	87
9. 排泄	35 (31.3)	50 (44.6)	24 (21.4)	3 (2.7)	112
10. 洗面・他	26 (32.9)	31 (39.2)	17 (21.5)	5 (6.3)	79
11. 環境整備	38 (25.3)	70 (46.7)	34 (22.7)	8 (5.3)	150
12. リハビリ・他	52 (39.7)	40 (30.5)	28 (21.4)	11 (8.4)	131
合計	410 (33.7)	530 (39.6)	212 (15.5)	137 (10.3)	1289

注1) 無回答を除く

注2) 項目1～4は以下のとおり

1. 「毎回、職員と一緒にいった」
2. 「最初だけ教えてもらい、あとは自分一人でいった」
3. 「一人でいった」
4. 「その他」

人で行った」と回答したのは、多い順に「歯磨き」(24.1%)、「移動」(23.4%)、「環境整備」(22.7%)、「洗面・他」(21.5%)であった。

5. 専門的知識と技術の必要性に関する実習学生の見解

実習生が実際に体験・観察した「ケア」項目・内容の専門知識と技術の必要性に関する見解に関する質問の結果を表5に示した。

「ケア」項目に関する事前学習の必要性について、「実習前に専門的な知識だけは学んでおくべきだと思う」、「実習前に専門的な知識を習得し、ある程度の技術を身につけておくべきだと思う」と回答した学生を合わせると72.9%とかなり高い値となった。すなわち学生は実習前に

ある程度の専門的知識や技術を学ぶ必要があると考えている。

一方、事前に専門的知識や技術を学んでから行くのではなく、「その場での職員さんの説明でよいので、実習前に専門的な知識・技術を身につけておくべきだと思う」、「その場で利用者さんに教わるものなので、実習前の専門的知識・技術は必要ないと思う」と回答した学生を合わせると17.3%となった。また、「自分の日常生活と変わらないので、特に専門的な知識・技術は必要ないと思う」という事前学習は全く必要ないと考えている学生が6.1%いた。

「ケア」項目別にみると、実習前に専門的知識だけあるいは知識と技術の両方が必要であると回答したのは、「送迎」、「移動」、「体位変換」、

表5. 専門的知識と技術の必要性に関する実習学生の見解

項目	実数 (%)					計
	1	2	3	4	5	
1. 送迎	52 (37.7)	68 (49.3)	11 (8.0)	2 (1.4)	3 (2.2)	136
2. 移送	40 (27.2)	86 (58.5)	11 (7.5)	6 (4.1)	3 (2.0)	146
3. 体位変換	20 (23.5)	52 (61.2)	8 (9.4)	2 (2.4)	2 (2.4)	84
4. 着替え	31 (25.8)	74 (61.7)	8 (6.7)	4 (3.3)	2 (1.7)	119
5. 一般浴	33 (27.5)	54 (45.0)	18 (15.0)	3 (2.5)	9 (7.5)	117
6. 機械浴	23 (37.1)	30 (48.4)	4 (6.5)	3 (4.8)	1 (1.6)	61
7. 食事	40 (26.5)	68 (45.0)	22 (14.6)	5 (3.3)	13 (8.6)	148
8. 歯磨き	26 (26.8)	37 (38.1)	21 (21.6)	6 (6.2)	7 (7.2)	97
9. 排泄	33 (27.7)	63 (52.9)	15 (12.6)	3 (2.5)	5 (4.2)	119
10. 洗面・他	30 (32.3)	37 (39.8)	10 (10.8)	4 (4.3)	12 (12.9)	93
11. 環境整備	27 (17.9)	54 (35.8)	33 (21.9)	11 (7.3)	26 (17.2)	151
12. リハビリ・他	40 (30.3)	39 (29.5)	33 (25.0)	8 (6.1)	8 (6.1)	128
合計	395 (25.8)	662 (47.1)	194 (13.3)	57 (4.01)	91 (6.1)	1399

注1) 無回答を除く

注2) 項目1～5は以下のとおり

1. 「実習前に専門的な知識だけは学んでおくべきだと思う」
2. 「実習前に専門的な知識を習得し、ある程度の技術を身につけておくべきだと思う」
3. 「その場での職員さんの説明でよいので、実習前に専門的な知識・技術を身につけておくべきだと思う」
4. 「その場で利用者さんに教わるものなので実習前の知識・技術は必要ないと思う」
5. 「自分の日常生活と変わらないので特に専門的な知識・技術は必要ないと思う」

「着替え」,「機械浴」,「排泄」が8割を超えている。反対に,事前に専門的知識と技術を必要としないと回答した項目で,高い値を示したのは「環境整備」17.2%,次いで「洗面等」12.9%,「食事」8.6%の順となった。これらの結果から,多くの学生は実習前に「ケア」の専門的知識と技術を学ぶ必要があると考えていることが明らかになった。

しかしながら,その必要性に関しては「知識だけはあった方がよい」から「知識も技術も習得しておく必要がある」まで,学生によってあるいは「ケア」項目ごとに様々であることがわかる。大学における教育上の観点から社会福祉援助技術現場実習として事前学習の必要性を論じるには,さらに検討を重ねる必要があるだろう。

う。この点については,北星学園大学の研究と同趣旨の見解を示している。しかしながら,実際に実習に行った学生が感じたこととして,実習先である程度の自信をもって実習に臨めることや,不要な不安感に苛まれないという精神面での安定を得られる等のメリットも見逃せない。学生に必要な教育を提供するという観点からいえば,一定の事前学習を実施する必要性があると言えるだろう。

6. 「ケア」体験時に受けた指導の方法

実習中に実習生が「ケア」を体験・観察する際に,職員がどのような方法で指導をしたかについての結果を表6に示した。回答の多い順に,「その場でやってみせてくれた」が63.3%,「事

表6 「ケア」体験時の指導方法

項目	(複数回答)						実数 (%)
	1	2	3	4	5	6	
1. 送迎	10 (7.5)	58 (43.3)	86 (64.2)	45 (33.6)	29 (21.6)	13 (9.7)	241
2. 移送	5 (3.5)	66 (46.5)	88 (62.0)	52 (36.6)	27 (19.0)	15 (10.6)	253
3. 体位変換	2 (2.6)	32 (41.6)	54 (70.1)	26 (33.8)	17 (22.1)	12 (15.6)	143
4. 着替え	3 (2.7)	51 (45.9)	76 (68.5)	50 (45.0)	27 (24.3)	11 (9.9)	218
5. 一般浴	3 (2.7)	50 (45.0)	76 (68.5)	40 (36.0)	25 (22.5)	12 (10.8)	206
6. 機械浴	2 (3.8)	20 (37.7)	39 (73.6)	22 (41.5)	11 (20.8)	7 (13.2)	101
7. 食事	2 (1.4)	79 (55.6)	90 (63.4)	42 (29.6)	32 (22.5)	9 (6.3)	254
8. 歯磨き	2 (1.4)	30 (34.1)	60 (68.2)	29 (33.0)	16 (18.2)	12 (13.6)	149
9. 排泄	2 (1.8)	47 (41.6)	78 (69.0)	49 (43.4)	19 (25.7)	11 (9.7)	206
10. 洗面・他	2 (2.4)	37 (44.6)	55 (66.3)	27 (32.5)	18 (21.7)	12 (14.5)	151
11. 環境整備	2 (1.4)	76 (52.4)	66 (45.5)	57 (39.3)	24 (16.6)	13 (9.0)	238
12. リハビリ・他	4 (3.1)	66 (51.6)	48 (37.5)	48 (37.5)	57 (44.5)	32 (25.0)	255
合計	39 (2.8)	612 (44.9)	816 (63.0)	487 (36.8)	302 (23.2)	159 (11.4)	2415

注1) 無回答を除く

注2) 項目1~6は以下のとおり

1. 「前もって読むべきものを示してくれた」
2. 「事前に言葉で説明してくれた」
3. 「その場でやってみせてくれた」
4. 「一緒にやってくれた」
5. 「実施後、実施内容について説明・指導してくれた」
6. 「その他」

前に言葉で説明してくれた」が44.9%、「一緒にやってくれた」が36.8%、「実施後実施内容について説明・指導をしてくれた」が23.2%、「前もって読むべきものを示してくれた」が2.8%であった。

6割以上の学生が介助を行う際に職員からその場で指導を受けており、「ケア」項目の中で最も高い値を示したのは「機械浴」(73.6%)、次いで「体位変換」(70.1%)、「排泄」(69.0%)、「着替え」と「一般浴」が同率(68.5%)であった。

また、介助等のケア体験を行った後に説明、指導を受けたのは、「リハビリテーション・他」(44.5%)が際立って高い。それ以外の項目は殆どが2割程度しか受けておらず、比較的少ないことがわかった。

7. 「ケア」体験の必要性に関する理由説明の有無

実習生が「ケア」を行うことの必要性を実習施設の職員から説明がなされたかどうかについての結果を表7にまとめた。実習生が「ケア」

表7 「ケア」体験の必要性に関する理由説明の有無
実数 (%)

項目	はい	いいえ	計
1. 送迎	30(25.4)	88(74.6)	118
2. 移送	31(24.2)	97(75.8)	128
3. 体位変換	13(18.8)	56(81.2)	69
4. 着替え	18(17.5)	85(82.5)	103
5. 一般浴	21(21.0)	79(79.0)	100
6. 機械浴	12(24.5)	37(75.5)	49
7. 食事	30(22.2)	105(77.8)	135
8. 歯磨き	20(24.7)	61(75.3)	81
9. 排泄	19(18.4)	84(81.6)	103
10. 洗面・他	13(16.7)	65(83.3)	78
11. 環境整備	32(24.2)	100(75.8)	132
12. リハビリ・他	23(19.8)	93(80.2)	116
合計	262(21.4)	950(78.5)	1212

注1) 上位項目別・無回答を除く

を行う必要性について、職員から「説明を受けた」と回答した者が21.4%であるのに対し、78.5%の実習生が「説明を受けていない」と回答した。「ケア」項目別のばらつきは殆ど見られず、いずれの項目においても7割から8割の実習生が「ケア」を行うことの必要性に関する理由の説明を受けていないことがわかった。

社会福祉援助技術現場実習において「ケア」体験をすることの意味や必要性には、「利用者を理解すること」、「利用者の身体的側面を理解すること」、「介護技術の実際を学ぶこと」、「生活場面や介護場面におけるコミュニケーションのとり方を学ぶこと」等が挙げられる。このような説明を学生が実習中に受けることは、施設における「ケア」中心の実習を行ううえで重要な意味をなすものであると考えられる。

8. 「ケア」体験とソーシャルワーカーの仕事内容との関係

「ケア」体験とソーシャルワーカーの仕事内容
表8 「ケア」体験とソーシャルワーカーの仕事内容との関係
実数 (%)

項目	はい	いいえ	計
1. 送迎	91(71.7)	36(28.3)	127
2. 移送	95(70.9)	39(29.1)	134
3. 体位変換	45(60.0)	30(40.0)	75
4. 着替え	71(67.6)	34(32.4)	105
5. 一般浴	62(57.9)	45(42.1)	107
6. 機械浴	23(45.1)	28(54.9)	51
7. 食事	87(64.0)	49(36.0)	136
8. 歯磨き	55(61.8)	34(38.2)	89
9. 排泄	65(60.7)	42(39.3)	107
10. 洗面・他	45(53.6)	39(46.4)	84
11. 環境整備	77(56.6)	59(43.4)	136
12. リハビリ・他	79(66.4)	40(33.6)	119
合計	795(61.3)	475(39.1)	1270

注1) 上位項目別・無回答を除く

との関係を表8に示した。実習生が体験した「ケア」はソーシャルワーカーの仕事に含まれていたかという質問に対して、「ソーシャルワーカーの仕事に含まれていた」と回答したのは61.3%で、反対に「ソーシャルワーカーの仕事ではなかった」と回答したのは39.1%であった。

「ケア」項目別に見ると、「ソーシャルワーカーの仕事に含まれていた」のは、「送迎」(71.7%)が最も高く、次いで「移動」(70.9%)、「着替え」(67.6%)、「リハビリテーション・他」(66.4%)、「食事」(64.0%)、「歯磨き」(61.8%)、「排泄」(60.7%)の順となっている。逆に「ソーシャルワーカーの仕事に含まれていない」項目で最も高い値を示したのは「機械浴」(54.9%)、

次いで「洗面・他」(46.4%)、「環境整備」(43.4%)、「一般浴」(42.1%)、「体位変換」(40.0%)、と続き、「排泄」(39.3%)となった。それ以下の順位は、「ソーシャルワーカーの仕事に含まれていた」項目で高い値を示した順位と同様である。

実習生は、かなりの割合で「ソーシャルワーカーの仕事」として「ケア」体験を行っていると考えていることがわかる。

9. 「ケア」体験時の不安

実習中の「ケア」体験に対して不安を感じたかという質問の結果を表9にまとめた。「いつも不安を感じていた」が6.7%、「ときどき不安を感じることがあった」が22.6%であった。「ケア」項目別では「いつも不安を感じていた」の

表9 「ケア」体験時の不安

項目	実数 (%)					計
	1	2	3	4	5	
1. 送迎	9 (7.3)	39 (31.5)	37 (29.8)	33 (26.6)	6 (4.8)	124
2. 移送	14 (10.2)	46 (33.6)	31 (22.6)	38 (27.7)	8 (5.8)	137
3. 体位変換	4 (5.4)	19 (25.7)	19 (25.7)	22 (29.7)	10 (13.5)	74
4. 着替え	8 (7.3)	33 (30.3)	35 (32.1)	27 (24.8)	6 (5.5)	109
5. 一般浴	12 (1.3)	21 (19.8)	29 (27.4)	37 (34.9)	7 (6.6)	106
6. 機械浴	7 (14.0)	12 (24.0)	10 (20.0)	15 (30.0)	6 (12.0)	50
7. 食事	12 (8.8)	39 (28.5)	32 (23.4)	49 (35.8)	5 (3.6)	137
8. 歯磨き	2 (3.4)	10 (11.5)	22 (25.3)	48 (55.2)	4 (4.6)	86
9. 排泄	6 (5.6)	26 (24.1)	30 (27.8)	42 (38.9)	4 (3.7)	108
10. 洗面・他	2 (2.3)	19 (22.1)	12 (14.0)	49 (57.0)	4 (4.7)	86
11. 環境整備	1 (0.7)	7 (4.9)	13 (9.0)	120 (83.3)	3 (2.1)	144
12. リハビリ・他	6 (4.8)	20 (15.9)	27 (21.4)	70 (55.6)	3 (2.4)	126
合計	83 (6.7)	291 (22.6)	297 (23.2)	550 (41.6)	66 (5.7)	1287

注) 項目1～5は以下のとおり

1. 「いつも不安を感じていた」
2. 「ときどき不安を感じることがあった」
3. 「最初だけ不安を感じた」
4. 「最初からほとんど不安を感じなかった」
5. 「その他」

は「機械浴」(14.0%)が最も高く、次いで「一般浴」(11.3%)、「移動」(10.2%)「食事」(8.8%)の順となった。「ときどき不安を感じるがあった」で最も高い値を示したのは「移動」で33.6%、次いで「送迎」(31.5%)、「着替え」(30.3%)、「食事」(28.5%)の順となった。また、「最初だけ不安を感じた」(23.2%)を含めると約5割の学生が「ケア」体験中に何らかの不安を感じたと回答している。一方、「最初からほとんど不安を感じなかった」と回答した学生は41.6%で、質問のなかで最も多い割合となっている。「最初だけ不安を感じた」(23.2%)を含めると、6割以上の学生が「ケア」体験中にあまり不安を感じていないことがわかった。

10. 「ケア」体験時の危険

「ケア」体験中に危険なことを体験したかとい

う質問に対して、3.3%の学生が「自分の介助で危険なことが実際にあった」と回答した。項目別には、「体位変換」が最も高く8.3%を示し、次いで「移動」(5.3%)、「送迎」「洗面・他」(4.8%)、「食事」(4.4%)であった。

また、「危険を感じるがあった」と回答した学生は15.8%で、項目別では、「機械浴」が最も多く27.1%、次いで「移動」(25.8%)、「食事」(21.2%)、「体位変換」(19.4%)の順い高い値を示した。なお、80.4%の学生が「危険なことはなかった」と回答しており、「ケア」体験中に危険を感じた学生は2割程度と少ないことがわかった。

11. 「ケア」体験の割合

「ケア」体験の割合について、「実習の総割合から見てあなたの体験した『ケア』は何割です

表10 「ケア」体験時の危険

実数 (%)

項目	1	2	3	計
1. 送迎	6 (4.8)	20 (16.1)	98 (79.0)	124
2. 移送	7 (5.3)	34 (25.8)	91 (68.9)	132
3. 体位変換	6 (8.3)	14 (19.4)	52 (72.2)	72
4. 着替え	3 (2.9)	16 (15.2)	86 (81.9)	105
5. 一般浴	2 (1.9)	21 (20.2)	81 (77.9)	104
6. 機械浴	0 (0)	13 (27.1)	35 (72.9)	48
7. 食事	6 (4.4)	29 (21.2)	102 (74.5)	137
8. 歯磨き	3 (3.6)	5 (6.0)	76 (90.5)	84
9. 排泄	3 (2.8)	13 (12.1)	91 (85.0)	107
10. 洗面・他	4 (4.8)	8 (9.5)	72 (85.7)	84
11. 環境整備	0 (0)	5 (3.5)	138 (96.5)	143
12. リハビリ・他	2 (1.6)	18 (14.4)	105 (84.0)	125
合計	42 (3.3)	196 (15.8)	1027 (80.4)	1265

注) 項目1～3は以下のとおり

1. 「自分の介助で危険なことが実際にあった」
2. 「危険を感じるがあった」
3. 「危険なことはなかった」

表11 「ケア」体験の割合

割合	度数	%
0～1割	55	25.9
2～3割	43	20.3
4～5割	18	8.5
6～7割	30	14.2
8～9割	42	19.8
10割	6	2.8
無回答	18	8.5
合計	212	100

か」という質問に対し、25.9%の学生が「0～1割」と回答しており、全割合の中で最も高い数値となった。次いで「2～3割」では20.3%、「8～9割」は19.8%に上った。一方、最も少なかったのは、「4～5割」で8.5%に留まっている。このことから、多くの学生が「ケア」体

験を行う実習施設と殆ど「ケア」体験をしない実習施設と分化している傾向が窺える。

実習先の種別によって「ケア」の体験する割合は異なることは容易に想像できる。実習先種別ごとの「ケア」体験の割合については、今後の課題としたい。

12. 実習前後のソーシャルワークに対する実習学生のイメージ・意識の変化

ソーシャルワークと「ケア」との関係について、実習生に3つの質問をしている。一つ目の質問は、実習前のソーシャルワークと「ケア」のイメージ・意識についてである。実習前のイ

表12 実習前後のソーシャルワークに対するイメージ・意識の変化

(1) 実習前のイメージ

	度数	%
まったく異質のもの	39	18.4
ソーシャルワークの相談援助業務に役立てる	45	21.2
ソーシャルワークの重要な業務	94	44.3
同じ	13	6.1
その他	3	1.4
無回答	18	8.6
合計	212	100.0

(2) 実習後のイメージ

	度数	%
まったく異質のもの	17	8.0
ソーシャルワークの相談援助業務に役立てる	39	18.4
ソーシャルワークの重要な業務	123	58.0
同じ	10	4.7
その他	5	2.4
無回答	18	8.5
合計	212	100.0

(3) 実習後の意識の変化

	度数	%
変化した	107	50.5
変化していない	88	41.5
無回答	17	8.0
合計	212	100.0

メージ・意識における「ケア」の仕事とソーシャルワークとの関係では、18.4%の学生が「まったく異質のもの」と考えていた。また、「ソーシャルワークの相談援助業務に役立てるもの」が21.2%、「ソーシャルワークの重要な業務」が44.3%であった。

ところが、実習後になると「まったく異質のもの」と回答した学生が8.0%になり、実習前と比べて約10%も減少している。「異質」と回答した学生が減少し、「ソーシャルワークの重要な業務」と回答した学生が約15%近くも増加していることがわかる。

また、実習中の「ケア」体験によって、「ソーシャルワークのイメージが変化した」と回答した学生が50.5%であった。半数以上の学生が、実習に行って現場を経験したことによってソーシャルワークのイメージが変わったと認識したことが明らかになった。

13. 実習内容の振り返り

実習内容を振り返り、自分の行った実習がソーシャルワーク実習であったと回答した学生は16.5%に留まっており、かなり低い結果となった。一方、「ケアワーク実習」は56.1%と過半数の学生がケアワーク中心の実習を行っていることが明らかになった。また、「その他」が21.2%となっている。

この結果から実習ではケアワーク実習を行ったという実感があまりにも大きいことがわかる。

学生がソーシャルワーク実習とケアワーク実習をどのように峻別して回答したかという点は、学生それぞれが持っている概念に委ねられている。アンケートを実施する際に、ソーシャルワーク実習とは何を指しているのかをクラス担当者から説明してもらったが、学生に明確なイメージを与えることができていないままに回答させたためこのような結果が現れたのかもしれない。

今回の結果は、関西福祉大学が所在し現場実習を展開している周辺地域におけるソーシャルワーク実習教育がどれほど定着し浸透しているかを物語っている。今なお、社会福祉援助技術現場実習でありながら、ケアワーク中心の実習プログラムが行われているという予想通りの結果となっている。さらに、この結果を実習先の分野別に分析を加え、それぞれの施設機関でどのような実習内容で実習したのかを追求する必要があるだろう。

IV. まとめ

調査結果から、本学の実習生の実習施設機関における「ケア」体験の実態が明らかになった。特に今回は、「体験した」項目に限定して上位順に見ることにより、多くの学生が実習中に行ったことを明確にし、今後の実習事前教育におけるケアワーク学内実習の授業内容に可能な限り役立てようというのが目的のひとつであった。

この結果から言えることは、上位「ケア」項

表13 実習内容の振り返り

	度数	%
ソーシャルワーク実習	35	16.5
ケアワーク実習	119	56.1
その他	45	21.2
無回答	13	6.2
合 計	212	100.0

目の各項目別の平均値の3割以上の学生が体験したという「移動」,「環境整備」,「食事」,「着替え」,「一般浴・洗髪」については,一定の知識および方法,技術に関して事前に習得させる機会が必要であると考えられる。

そのうち,下位「ケア」項目で高い値を示したのは,「掃き掃除・拭き掃除」,食事の「準備(誘導・エプロン・配膳等)」,食事の「あと片付け」,「歩行の見守り」等となっている。これらは,実習先において学生でも比較的容易に関わったり,対応できるものが高い数値として現れており,実際に多くの学生が体験していると言えるだろう。この「ケア」体験は,普段の日常生活の中で行っていることであったり,実習先でしか体験できないものでもあるため,学内における事前学習の対象とはなりにくい。学生個人に適切な方法をもって実施できるよう注意喚起程度の指導を行うことでよいと考えられる。下位の「ケア」項目の中で高い値のものうち,体験者が多くかつ学内において実習が可能な項目については事前に学習させてから実習に行く方がよいのではないかと考える。

それらに該当すると考えられる項目を,体験率の高い順からカテゴリー別(上位「ケア」項目別)に見ていく。もっとも高い体験率を示した「移動」では,「車椅子を押し移動」,「車椅子とベッドや椅子間の移動」が,事前学習に必要であると考えられる。また,「環境整備」を除いて2番目に高い体験率である「食事」のカテゴリーの中では,「食事の一部介助」,「食事の全部介助」,「食事をしたがらない方の食事介助」,「飲み込みが困難な方の食事介助」のポイントが高い。

食事介助は,利用者の特性によっては誤嚥等の危険を伴うことがあるので,しっかりと事前に学ばせておく必要があるだろう。次いでポイ

ントの高いカテゴリーは,「着替え」で,「上半身部分介助」「トイレ内での下着の上げ下ろし」,「下半身部分介助」,「上半身部分介助」であった。丸首のパジャマ・ズボンや前開きのパジャマ・ズボン等を用いて,座位や立位での着脱の介助の練習が必要となるだろう。

次に,「ケア」体験時に不安を感じた「ケア」項目として,「機械浴」(14.0%)が最も高く,次いで「一般浴」(11.3%),「移送」(10.2%)となっている。これらの「ケア」項目については,実習前に行くまでに学内において知識や技術を伝達しておく必要があると考えられる。学生自身も「専門知識と技術の必要性に関する実習学生の見解」の結果から,知識や技術を実習の前に学ぶのがよいと思っている学生が72.9%に達していることがわかった。

これらから3年次前期に行われるケアワーク学内実習において,前出の「ケア」項目については事前に十分に指導し,学生に一定の知識と技術を習得させる必要性を見出すことができた。この調査結果を見ると,今日の社会福祉実習教育の課題の多さに驚嘆する。卒業後,ソーシャルワーカー(社会福祉士)を目指す学生にとって,「ケア」の技術を学ぶことの必要性や,実習中に体験頻度の多かった技術と技術的に高度な「ケア」に対する学内実習の必要性,ソーシャルワーカーの業務の実習生への実施等課題は山積している。また,本来ソーシャルワーク実習をするべきであるにもかかわらず,本学の現場実習ではケアワーク中心の実習が多数であることから,社会福祉実習教育をさらに充実させるためには現場との信頼関係を築き,学生指導のための連携が重要であると考えられる。

本稿では紙面の都合上,北星学園大学との比較や分野別(児童,障害者,高齢者,福祉事務所,児童相談所,社会福祉協議会等)のクロス

集計および分析を報告することができなかった。これから北星学園大学との差異とその要因を追究するとともに、実習先の分野別に行われている「ケア」の内容をさらに詳しく分析することにより、事前教育のあり方を研究したい。

最後に、本調査の関西福祉大学での実施および報告にあたりご快諾いただき、また有益なご助言をいただきました北星学園大学社会福祉学

部の久能由弥先生、研究メンバーの先生方に深く感謝いたします。

引用文献

久能由弥 米本秀仁 「北星学園大学特別研究助成（2002年度・2003年度）社会福祉援助技術現場実習における『ケア』体験の現状に関する調査報告書」2004年 北星学園大学社会福祉学部